

桐の葉も踏み分けがたくなりにけりかならず人を待つとなけれど

式子内親王

『新古今和歌集』「秋」の一首。

式子内親王は、後白河天皇の皇女として生まれ、乙女時代の十年間(十歳〜二十歳ぐらい)を賀茂の齋院(賀茂神社に奉仕する未婚の皇女)として仕えている。齋院はいわば神に捧げられた女性であるから、現世の男との関係は厳しく戒められた。さらに、その後は出家もしているので、女性としての現実的な幸福にはあまり恵まれなかったのではないか(あくまで想像だけなど)。

たおやかでありながら、否定し反転する独得の韻律は、恋心や女としての本心をあらわにしてはいけない境遇によって磨かれたものなのかもしれない。

そんな内親王が五十歳前後に詠んだ百首詠のなかの一首。「ただでさえひなびた侘しい住まいに、桐の落葉も庭の小径を埋め尽くして、もう踏み分けがたいほどになつてしま

ったことです。必ずしもどなたかをお待ちしているというわけでもないのですが……」。

ふーむ。待つていないというわりには、「なりにけり」の詠嘆にずいぶん情感がこもっている。それでいて、必ずしも待つているわけではないという。はたして、待つているのかいないのか、なにやらもやもやした感じ。しかし、「人間なんてもううんざり、男なんてこりごり」という心境だったらこんな歌は生まれえない。心のどこかで、来るはずのない人(あるいは亡き人であったとしても)を待つている。そのことにみずから気づいたかすかな心の揺らぎ、読後にたゆたう艶やかな余情こそが、この歌のテーマなのである。

後鳥羽院は「内親王は殊にもみもみとあるやうに詠まれき」と評したという。

控えめなような曖昧なような、ときには老練なような。表向きの意味とは異なる気持ちに滲ませたりする。日本人の得意なこの(もみもみ体)の風上に、艶えんなる内親王の歌の花が、美しく咲いている。

(小島ゆかり)

